枕流キリシタン巡礼紀行（2017.6　四国土佐）

キリシタン巡礼・四国土佐の旅

　これまでキリシタンの足跡を追って九州は五島から北海道松前まで各地を歩いた。訪れたいところがまだまだ沢山ある中で、四国はまだ一度もなく機会を待っていた。山深い祖谷などに平氏の落人が身を隠していた事実もあるので、江戸の禁教下、キリシタンが隠れるには好適な場所が四国には多くあると思っていた。しかし私の知るかぎりでは四国にキリシタンが隠れてひっそり生活していたとの情報がない。もっとも禁教以前には徳島や香川などにキリシタンが居た記録はある。また明治政府になってから長崎浦上で捉えられた隠れキリシタン達が四国のいくつかの藩に配流されて過酷な獄生活を送っている。そこで今回たまたま高知県に出かける機会を得てついでに土佐におけるキリシタンの情報を調査することにした。

　さて、今回の高知行きは、足摺岬の近く土佐清水市で病院の院長をしている高校時代の友人に長年高血圧で悩んでいると話したら、それなら一度ゆっくり療養がてら清水（地元では単に清水と言う人が多い）に来てみないかとの話になった。そこで環境も良いし魚もおいしい清水に出かけることにしたのである。あまり長逗留はできないが 5 月 17 日から 10 日間都合をつけ、早朝の新幹線で岡山へ、特急南風に乗り継いで中村（今は四万十市）で下車した。迎えの病院の車で清水に向かったが、中村から清水まで小一時間かかる。家を出てから到着まで 8 時間半、かなり疲れた。私は自由に行動できるよう交通の便利な町のビジネスホテルに泊まることにした。午前中は病院の療養プログラムに従い（通院は 6 日）、午後はバスや病院の職員から借りた自転車で清水を始め中村や宿毛などの図書館や歴史資料館を駆けずり回った。清水は鰹の水揚げが日本 1~2 を誇る魚の町である。関西では食べられない朝漁れの鯖の刺身も安く食べられる。高いが足摺岬の岩礁で漁れる伊勢海老の姿作りも極めて美味であった（これは友人のおごり）。食べた後の頭などをぶちこんだ味噌汁は何ともダシがきいて忘れられない味である。こんな新鮮な魚を毎日食べていれば病気にはならないだろう。確かにスーパーを覗いても魚は安い（魚以外は大阪価格よりかなり高い）。私は夜は外食したので町の小料理屋を食べ歩いたが、近年鰹の水揚げ（特に近海の一本釣り）が減って鰹料理が高くなったという。なんでも鰹が黒潮に乗って日本近海に来るまでに外国魚船が先取りするためらしい。

土佐のキリシタン第一号・中村一条家の四代目

　室町時代、中村地方は関白・一条家の荘園だった。都から遠く離れた地にも荘園があったとは驚きだが、中村は四万十川の河口にあるため交通の便はよく、大坂から船だけで都と往来できたのである。京都が丸焼けになった応仁の乱の時、難を避けて中村に下向してきたのが一条家第 9 代の一条義房（1423~1480）である。彼は対明貿易の中継地として中村の基礎を築いた。その息子・一条房家（1475~1539）が中村一条家初代として京都をモデルにして条里制を敷いた街づくりを行った。今日の小京都・中村の町はほぼその頃形成された。大文字焼も伝統行事として今なお実施されている。葵祭ならぬ藤祭（一条公家行列、5 月 3 日）もある。ちなみに全国に小京都とよばれる町が沢山あるが京都に似つかぬ町が多くて私はこの呼び名は好きでない。しかし公式「小京都」なるものがあることを今回中村に来て初めて知った。実は旧中村市が京都の観光協会と話

し合って京都との繋がりを大切に守っていこうと中村市が全国京都会議の結成を提唱し、この京都会議に加盟を許された自治体だけが公式に「小京都」と言える由である(現在 46)。加盟の条件は　1.京都に似た自然景観　2.京都との歴史的繋がり　3.伝統的産業と芸能があること　で必ずしも三つの条件が必要不可欠ではないらしいが、3 条件とも備えているのはこの中村だけとのことである。　―閑話休題―　さて、第 2 代房冬は伏見の宮家の王女を嫁にもらい、対明貿易で稼いだ多額の金で天皇家一族や公家を支えた。第 3 代房基は豊後の領主大友宗麟の妹を嫁にしてキリシタン大名大友家との縁を深めたが短命に終わった。第 4 代兼定(1542~1585)も大友宗麟の娘を嫁にして公家から武家大名に転じたが、四国の大大名長曽我部氏の調略によって中村を追われ豊後に避難した。そして避難先の大分で洗礼を受けドン・パウロと名乗った。土佐で最初で唯一のキリシタン大名になった。しかし中村のことが忘れられず大友氏の支援で中村に戻ったが、四万十川で長曽我部軍との戦いに敗れ、捉えられて伊予の戸島に流され幽閉の身となった。戸島では島民たちの生活を助け宮様として慕われたという。そこで天主の国造りを目指したとも言われる。中村の歴史資料館を後にして中村出身の幸徳秋水の墓を見てから近くの一条神社に向かった。一条神社はかつての一条家の御所館跡である。一条家の手がかりを更に得ようと神主を訪ねたが不在だった。一条家亡き後は山ノ内家の支配下になったがその城跡は今は痕跡を残すのみらしい。

　翌日午後、今度は吉田茂元首相の出生地である宿毛市にバスで出かけた。宿毛も古い城下町であるが今はその面影はない。宿毛歴史館に出向いて学芸員にキリシタン情報や資料を求めたがなしのつぶてだった。そこで近くの図書館によって検索をお願いしたところ四国のキリシタンについての本が 3 冊あった(いずれも四国在住の郷土歴史家の著作。香川、高知の地方出版社発行ですでに絶版)。しかし借りて帰るわけにもいかず帰りのバスの時間までページをパラパラめくり読みするしかなかった。そこで清水の図書館でそのうちの一冊「土佐とキリシタン」(石川潤郎著、高知市西村謄写堂出版)を見つけ、3 日間通ってほぼ目を通すことができた。その本は土佐でのキリシタンについてかなり詳しく紹介しているが、それによると徳川の禁教以前に布教のため土佐にまでやって来た外国人宣教師はなかったらしく、キリシタンの存在もごく少数である。

明治政府による土佐へのキリシタン配流

　遠藤周作の「沈黙」の映画が反響を呼んでいるだが、これは長崎・外海に隠れて信仰を守りつづけた人達の心打たれる物語である。江戸幕府は高札を掲げてキリシタンを見つけ次第処刑し、かつ鎖国政策により外国の宗教や文化が入ることを厳しく監視した。幕藩体制が崩壊したあとも明治政府は引き続きキリスト教を禁止、長崎で隠れキリシタンの存在がわかるや直ちに彼らを捕縛し処分を各藩に命じた。その指揮にあたったのが長州藩・桂小五郎こと木戸孝允である。初めは30藩に4000余名であったが廃藩置県の混乱もあって引き受け拒否する藩が多く出て結局西日本の反幕藩を説得して 24 の藩に 3294 名の処分を課した(1868 年)。土佐に割り当てられたのは 116 名、明治 2 年(1869)12 月長崎を船で出発、今の松山港(三津浜)に上陸、雪深い四国山脈を越えて高知県香美郡赤岡村にあった藩の 2 ヶ所の牢獄に収容された。四国では宇和島藩と松山藩も引き受けている。明治政府は彼らに対して必ずしも極刑を命じたわけではないらしく、1 日あた

り米5合に味噌、野菜を支給すること、労働を許可しそれに見合う労賃を支給すること、部屋は男女別、家族ごとにしてもよいとした。しかしそれらは表向きで実情はまさに地獄そのものだった。土佐藩の記録では牢がせまいため8畳に40名、3畳に16名といったすし詰めにおしこめられ、半分が立ち後の半分が座って交互にくりかえしたとある。食事も飯は茶碗1杯に白湯と塩のみ、労働も認められなかった。女性は定期的に洗濯のため小川にでられたので、沢蟹や小魚を捕まえて生食、野草や山菜をとって飢えをしのいだという。このような状態が外圧によって禁教令が解除された明治6年(1873)まで続いたのである。

ジョン万次郎帰国にまつわる謎

足摺岬に立つジョン万次郎

四国土佐は竜馬でもつと言われるほど坂本竜馬は土佐のｽｰﾊﾟｰｽﾀｰである。ところが清水に限っては万次郎がｽｰﾊﾟｰｽﾀｰである。いずれにしろ万次郎と竜馬は幕末の日本歴史を語る上で共に必要不可欠な人物である。万次郎は1827年清水の中浜の漁師の二男坊として生まれ、幼少で父親を亡くし、家計を助けるべく子供の時から漁を手伝っていた。14歳のとき嵐にあい九死に一生を得て鳥島に漂着、仲間の4人と140日余孤島で命をつないだ。偶然通りかかった米国の捕鯨船ｼﾞｮﾝ･ﾊｳﾗﾝﾄﾞ号に救助された(1841)。米国へ帰国途中ハワイのホノルルで仲間は下船、船長は万次郎(John Mung と呼ばれる)の英語上達の速さ、旺盛な知識欲に感ずるところあり彼一人を伴って母港のﾌｪｱﾍﾌﾞﾝにもどった(1843)。船長は彼を養子にして専門学校(ﾊﾞｰﾚｯﾄｱｶﾃﾞﾐｰ)で教育を受けさせ、数学、天文学、航海術、造船学など船乗りとしての基本技術を習得し、学校では主席になるほど優秀であった。1846 年卒業してすぐ捕鯨船の給仕として乗りこみ、ほどなく捕鯨船の副船長から船長として数年間大西洋から太平洋をかけ巡ったが、次第に日本帰国の念が強くなり、その資金を得るため船を降りてｺﾞｰﾙﾄﾞﾗｯｼｭに湧くサンフランシスコの金鉱に行き働いた。数か月後得た$600で小型の船(ｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｰ号)を手に入れた。そしてホノルルに渡り旧仲間と再会した。そこから上海行きの商船にｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｰ号を載せ仲間二人と上海に向かった。そして再びｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｰ号に乗って沖縄の港に入った。そして出頭した薩摩藩の番所で尋問を受け、直ちに鹿児島に送られた(1851)。24歳、10年ぶりの祖国の土である。そこで私の疑問である。当時日本はまだ鎖国中の禁教下で日本人でも海外からの入国は不可。そのような時にどこの馬の骨ともわからない彼らはどうして入国できたのか?　しかもクリスチャンとわかれば尚更のこと。ただちに密入国者として国外追放されたであろう。

ご多分にもれず万次郎は薩摩藩の厳しい取り調べを受けたが英語しか話せず、取り調べには通訳を必要とした。しかし万次郎らの奇想天外な話に取り調べる方も驚き、島津斉彬までが直接彼に尋問するという珍事だったらしい。斉彬は彼の話(外国の先進技術や事情)は役に立つと広く藩士たちに聴講させ優遇したという。だがいつまでも薩摩に拘束しておくわけにもいかず、幕府の出先である長崎奉行所に送り届けた。そこで再び厳しい取り調べを受け白洲に呼び出されること18回に及び、踏絵もさせられたがパス、入国許可となって出身地の土佐藩に引き渡された。日本の土を踏んで故郷に帰るまで2年たっていた。土佐藩でも家老の吉田東洋が取り調べにあたり、彼の知識を高く評価し士分にとりたて、藩校「教授館」の教授に任じた。そこで後藤象二郎や多分竜馬も受講したと考えられる。通訳の蘭学者・河田小竜が彼の体験談を記録して出版した。

この「漂異紀略」と題した本は一躍有名になり、増刷されて江戸や各藩でもひろく読まれた。評判を聞いた幕府はさっそくヘッドハントして彼を旗本に抜擢した。その頃丁度ペリーが来航して開国・通商条約の締結を幕府に迫っていた時期であり、幕府にとっては得難い人物として交渉の任(通訳として)にあたらせたのである。

ともかく私は厳しい鎖国令と禁教令の下、自前の船まで用意して密入国同然に帰国した万次郎がどうして幕府の厳しい取り調べをパスして入国できたのかその謎が気になって手掛かりを得るべく清水の万次郎資料館に出かけた。こじんまりした資料館だが万次郎個人の資料館としては展示資料はかなり豊富である。残念ながら詳しく話のできる学芸員はいなかった。そこで清水を去る前日の午後図書館に出向き、知り合いになった館員に参考資料がないか聞いてみた。すると市役所に万次郎のことをよく知る外人さんがいるという。すぐにその外人さんを訪ねて市役所に向かい呼んでもらった。商工観光課に務める外人さんは年のころ 30 歳前後の青年で日本語も達者である。6 年前英語教師としてここに配属されたが、なんと「漂異紀略」の英語訳が手に入り、それを読んでから万次郎のファンになった。そして英語教師から市役所に転職?し万次郎などのイベント企画に携わっているのだという。その英訳本をみせてもらったが、蒸気機関車や他の機械の絵、建物や服装・風俗などの絵も入っている。彼に万次郎が洗礼を受けたかどうかまず聞いてみたら資料を取り出してきて彼はﾕﾆﾃﾘｱﾝ教徒だったと教えてくれた。彼の資料によると捕鯨船の船長(Cap.Whitefield)と養子縁組した万次郎を日曜学校に通わせようと船長が会員である教会の家族席に彼を伴ったところ、教会側から非白人は黒人席(カラー席)に座るよう言われて怒った船長が教会を脱会し人種差別しないﾕﾆﾃﾘｱﾝ教会に移った。船長は万次郎をそこまでしてわが子同然に養育したのである。なお、今年の 5 月 13 日付の朝日新聞に日野原重明氏のブロクが載っている(日米の懸け橋、ｼﾞｮﾝ万次郎)。それによると氏が船長の家が売りに出されたという情報を知って募金運動に乗り出し、集まった 8 千万円で買い取りﾘﾌｫｰﾑして JohnMung-Whitefield 記念館として開館した。また桜も多数植樹した由である。

万次郎が入国を許可されたことについて彼の意見を聞いてみたが、そんなことは考えてもみなかったそうだが、二人で議論してほぼ一致した意見は次のようである。　{万次郎らは都から遠く離れた漁村の漁師、無学で幕府の鎖国だの禁教だのまったく関係なく、漂流して米国人に救われ米国で生活して何も知らずに日本に戻ってきた。仮に踏絵を踏めと言われても訳もわからず言われた通り踏んだ。当時は異教(ｷﾘｽﾄ教)と言えばｶﾄﾘｯｸで、ﾕﾆﾃﾘｱﾝの彼にはｶﾄﾘｯｸのことは何も知らなかったと考えられる。特にﾕﾆﾃﾘｱﾝはﾌﾟﾛﾃｽﾀﾝﾄとも異なる独特の教義をもつため、彼にお前はｶﾄﾘｯｸかと尋問してもただ no としか言えなかったろう。一方彼はすでに薩摩で調べを受け島津斉彬からの信任状をもって長崎に送られてきたので密入国者として安易に処分もできず奉行所での取り調べは事実上形式的なものではなかったか?}　と言うものだが真相は推測するしかない。

今治のキリシタン殉教碑

24日早朝ホテルをでて清水7時発中村行きの一番バスに乗る。バスの便が少ないので通勤、通学バスになる。清水にも県立高校があるが中村の高校に行く生徒も結構多いらしく満員である。中村から黒潮鉄道(元JR)で JR 予土線の始発駅窪川へ。実は四万十川に沿って走る予土線は初めてで一回乗ってみたいと思っていた線である。窪川で乗り替えるとき駅員に予土線のホームを訪ねると陸橋の向こうを指してあの新幹線がそうだという。?新幹線?ともかく重いバッグを背負い、左手にキャリヤバッグと右手に杖をもって陸橋を上り下りはつらい。四国の駅はエスカレータもエレベータもないので股関節を病む身には苦労する。階段を下りた先に確かに新幹線もどきの汽車が1両停まっている。昔々の古い「こだま」の先頭車を模したミニ新幹線といったところ。私は一番前の席に座っていると数人の外人が乗りこんできて盛んに写真を撮っている。片言の英語で尋ねるとオーストラリアから来た鉄道愛好家のグループだと言う。その中に日本語を話す人がいて主にその人と話をしたのだが、自分はメルボルンにすんでいて通訳兼ガイドとしてついてきた、日本の鉄道は大変魅力的だと言う。時間が正確、時速の割に横揺れが少ない、車窓の変化に富んでいるからという。それに比べてオーストラリアの汽車は時間はルーズで線路が悪くて振動が激しく、景色に変化なく退屈とのこと。オーストラリアは車と飛行機が発達しているので、一般人はあまり列車に乗らない。特に長距離列車に乗るのは定年退職した人達がワインとおいしい料理を食べながらのんびり会話を楽しんで時間を過ごす人が多いね。でも我々鉄チャンはアドベンチャーだよ。どこへでも出かけて行って知らない鉄道に乗るのが生きがいとのことだった。どこの国にも鉄道お宅がいるもんだね。窪川を出てすぐ日本では唯一のトンネルループがあるのだが、地元の人でも単に長いトンネルと思っている人が多く、ループになっているとは気付かない。しかし驚いたことにオーストラリアの鉄チャンはそれを知っていて、予土線を紹介した英語の「日本の鉄道」を見せてくれた。さて私は北宇和島で松山行きに乗り替え今治へ。今日の宿、湯の浦ハイツに4時ころ到着した。湯の浦温泉はﾗｼﾞｳﾑとフッ素の多い国民保養温泉として知られ、湯量も四国で1~2を争う。ハイツは高台にあって目の前に燧灘が広がり景色がよい。館内は清潔で明るく接客態度もよい。四国の宿は一般に遍路のおもてなし精神が行き届いているせいか親切である。

今治には四国では数少ないキリシタン殉教碑があり、その一つで市の有形文化財に指定されている殉教碑が波方にある。今回それを見るために今治に寄ったのだが、ただ詳しい場所が分からなかったので今治駅の観光案内所で聞いてもやはり知らなかった。そこで市役所に電話して問い合わせてもらった結果、波方の支所に来てくれれば職員が案内するからとのこと。JR で松山寄り二つ目の無人駅の波方に行き、今治で予め呼んでおいたタクシーで支所に出向いた。文化財課の職員が待っていてくれて車で案内してくれた。駅からそう遠くない田園の中、農道の脇にあった。以前は少し離れた田んぼの中に雨ざらしだったので、文化財指定の機会にここに移してブロックで囲い屋根で覆ったのだという。石碑は2基あり、凝灰岩に人物像が彫られている。説明板にはキリストとマリヤとあるが、手でなぞってみたがよくわからない。詳しい記録はなさそうだがキリシタンの殉教碑と言い伝えられている。

あまり風化していないのであるいは明治政府によるキリシタン配流の途中にこの近辺で亡くなった人の霊を慰めるためのものかも。波方の西隣りの大西町や南の玉川町にもキリシタン遺跡がある由だが、それらを回る時間がなく今回は断念した。今治 13 時発大阪行きの高速バスを予約していたので波方駅まで送っていただいた。徳島・阿南や香川・小豆島にもキリシタン遺跡があるので近いうちに機会を見つけて行ってみたいと思っている。

（追記）　説明板によれば石像は凝灰岩で四国地方に存在せず、大分の臼杵地方などに多く存在する。臼杵地方には昔から石仏が多い。それでこれは臼杵あたりで彫られて四国に持ち込まれたらしいとしている。左がキリスト像、右がマリヤ像と見られるが、私には果たしてそうなのか、キリシタンの慰霊のためのものかどうか疑問は残る。

人生はアドベンチャジャーニ

四国の旅といえばお遍路とくるほどお遍路は四国のシンボルである。今回も宿を予約する際、清水でも今治でもお遍路ですかと聞かれた。足摺岬にも第 38 番札所金剛福寺がある。私はこれまで少なくとも 3 回はここを訪ねているが、いつもお遍路さんが来ている。最近はツアーバスやマイカーでお遍路する人が多い。今回も久しぶりに訪れてみたが、何人かお遍路姿があった。朱印の受付で坊さんがお遍路さんの収印帳に文字を書いていたので横で見ていたが、すらすらっと書いて朱印を押し、ハイ 300 円といってまた次の人の収印帳を受け取っていた。1 冊仕上げるのに 1 分もかかっていない。お遍路さんに見せてもらったが見事な文字である。その達筆にほれて私もと思い坊さんに収印帳は持ってないがというと、大丈夫すでに書いてあるものがありますよと袋に入れた小さな朱印色紙を 300 円で売ってくれた。団体で沢山来たときのために用意しているようだ。それを収印帳に貼ればよい。お寺を一巡りして、門前の土産物屋で今年初のアイスクリームを食べた。店の女将さん曰く、最近お遍路さんも減ってね、車であわただしくやってきてあわただしく去っていくので食堂も旅館も閑古鳥ですよと言う。歩き遍路は稀ですよ、でも歩いてくるのは外人さんが多いとのこと。中村行のバスに乗るべく停留所に行くと肌黒い外人が一人座っていた。てっきり黒人さんかと思って、どこからと聞くとイギリスと答える。隣に腰かけてよく見ると日焼けで黒くなった年のころ 30 歳前後の青年だった。T シャツに G パン、小さな菅傘をリュックに結わいつけたバックパッカースタイル。片言の英語と日本語でいろいろ聞くと、40 日の休暇をとって四国遍路にやってきた、徳島から歩いたりバスに乗ったりすっかり日焼けした、あと帰国まで 4 日、これから中村にもどって松山に行くといっていた。日常会話の英語版を見せてこれで片言の日本語でトラブルもなく OK だったという。日本は初めてだがお遍路は素晴らしいトレッキングだ、英国では遺跡巡礼を好む人も多く、四国遍路も詳しく紹介した本があり、よく知られているという。彼もいつかフランスからポルトガルまでサンチャゴ巡礼の道を歩いてみたいと言っていた。ｵｰｽﾄﾗﾘｱの鉄チャン達も人生はアドベンチャといっていたし、英国の青年も遍路（巡礼）はアドベンチャと言いたかったのだろう。そういえば万次郎も自分で買った船に　ｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬ号と名付けて意気揚々と帰国?した。彼は船乗りのプライドをかけて自分の船で土佐の港に凱旋、人生のアドベンチャを飾りたかったのであろうか。人生まさにｱﾄﾞﾍﾞﾝﾁｬｼｾｬｰﾆならん!